

契約彼氏と蜜愛ロマンス

Icbika & Syogo

小日向江麻

Ema Kobinata



エタニティ文庫

目次

契約彼氏と蜜愛ロマンス

5

幸福への前奏曲^{プレリュード}

243

勘違い男の小夜曲^{セレナーデ}
書き下ろし番外編

317

契約彼氏と蜜愛ロマンス

「実はわたしも、結婚することになりましたよ」
コンペの打ち上げを兼ねた部署内の飲み会で、宴もたけなわとなったころ。ゆるふわへアの似合う理穂ちゃんも、突然そう宣言した。

「え、マジ？」

「よかつたじゃない、理穂。おめでとぅ〜！」

居酒屋の個室に歓声や拍手が湧く。時間を重ねて少々気だるげになっていたその場が、一瞬にして祝福ムードになった。

「おめでとぅ、真辺さん。式はいつの予定なんだ？」

部長が、酔いの回った真っ赤な顔で訊ねる。

誇らしげに「半年後です」と答える彼女の表情は、幸せいっぱいな笑みに満ちていた。

……結婚。また、独身が減るのか。

「旦那さまはどんな人？」とか、「新居はどこ？」とか。芸能リポーターばりの質問が

飛び交うなか、私、瀧川一華は長テーブルの端で、ひとり小さくため息をついた。

「瀧川、なにに暗い顔してんだよっ」

——と、そこへ妙な調子をつけた声を出しながら、社内でも面倒なキャラで知られる、同僚の戸塚がやって来た。また嫌なヤツが……。思わず顔をしかめそうになる。

彼は、ビールジョッキを片手に私の横へ腰を下ろし、反対の手で私の背中をばしんと叩く。背中に痛みが走った。

「いった！ 何すんのよっ」

私は、掘りごたつの下に下ろされただろう彼の足を、思い切り踏んづけてやった。すると、戸塚は鋭い痛みに呻き声を上げる。

「お、オレはただ、暗い顔してる瀧川を元気づけようとしただけなのに……」

よよよ……と泣き崩れる演技をしながら、取り皿が散乱するテーブルに突っ伏してみせる。彼の言動のすべてがうっとうしい。

「……別に暗い顔なんて」

「しつてまつすよ〜ん」

戸塚はむくりと顔をあげると、へらりと笑って言った。

「今考えてたこと、オレがズバリと当ててしんぜよう。『あー結婚か。また独身が減っちゃったな』だろ？」

戸塚はご丁寧に、私の物まねまでしてみせた。全然似ていない。けれど——
「つ……」

なぜわかるのか。そう言いたくなるところをこらえる。

「真辺は瀧川のふたつ年下だっけ？ そりゃ、先越されれば面白くないよな」

「そんなこと言つてないでしょ」

からかうようなニヤニヤ笑いに腹がたつてたまらない。キツと戸塚を睨みつける。

「またまた、凶星のくせに」

「そういうんじゃないってば」

苛立ちに任せ、今度は掘りごたつの床を足でドンと鳴らした。

嘘を言っているつもりはない。後輩の結婚は喜ばしいし、祝福しないわけなんかない。

不快感を露わにする私に構いもせず、戸塚はビールを一口呷る。

「ま、何でもいいけどさー。これで、うちの部の独身って、オレと瀧川だけになっ

ちやったんじゃなくい？」

「……そう言えばそうだね」

我が運営管理部の面々を頭に思い浮かべてみる。悲しいかな、どうやらその情報に間違いはないようだ。

「もらい手が無いなら、このオレがもらってあげよっか？」

「それは結構。余計なお世話」

「照れてんの？ ドキドキしちゃう？」

「そんなわけあるか！」

「おー、怖い」

私がくわっと目を剥くと、戸塚は自分を抱きしめるようにして怯えたふりをする。

このお調子者の勘違い男が。何が『もらってあげよっか』だ。冗談じゃない。

一千万……いや、一億円積まれても無理だな。

私が嫌悪感を募らせていると、彼は今さつき置いたばかりのビールジョッキを持ち上げた。

「真辺のこと、ひとまず形だけでも祝つてやりなよ？」

「形だけって——」

「大人なんだから。建前も大事、大事」

それだけ言い残すと、理穂ちゃんを中心としたお祝いの輪のなかへと戻っていく。

……だから、祝福してないわけじゃないんだってば！

椰揄まじりの戸塚の台詞に心のなかで反論しながら、私は手元にあるモスコミュールの入ったグラスを引き寄せて、一気に呷った。



酔い覚ましがてら、最寄り駅よりもひとつ手前で降りた私は、帰宅にひしめく人波をすり抜けて改札を出た。

瀧川一華。二十八歳。独身。

都内の大学を卒業してからずっと、惣菜そうさいを販売する小さな会社の運営管理部門で働いている。いわゆるごく普通のOLだ。

彼氏は、今はいない。

「今は」と言い続けて、もう何年になるだろうか。

はい、見栄みえを張らずに正直に言います。……ずっと長いこと、いません。

学生時代に、手を繋ないだり、唇が触れるだけのキスをしたりの清すぎるお付き合いの経験はある。だけど、互いを深く知り合うほどの本格的な恋愛は未経験。

男友達はいないわけじゃないけど、いわゆる飲み友達ってヤツで、異性を意識するよ
うな相手は皆無かひむだ。

なんてことを白状したら、理穂ちゃんも戸塚もさぞおどろくんだろうな。

……年齢を考えたら、当たり前か。

言い訳をするならば、私はどうも男性に女性扱いされるのが苦手というか、女性として意識されるのが気恥かぢずかしいのだ。

その裏には、「女性としての魅力」という部分での自信のなさがある。親しみやすさも社交性も標準程度には備わっていると思うけれど、私は、自他ともに認める負けず嫌けんい。男性に対しても「素敵すてきだと思われたい」というより「負けたくない」という感情のほうに先に来てしまう。

ゆえに、甘えたり弱みを見せたりすることができない。早い話が、可愛げのない女なのだ。

自分の内面を相手にさらけ出すことができないから、信頼関係を築けないのだと思う。『真辺は瀧川のふたつ年下だっけ？ そりゃ、先越されれば面白くないよな』

戸塚のからかうような声が、脳内に響く。ご丁寧に、エコーまでかかって。『別に面白くないとか、そんなんじゃないし』

コンクリートの地面を叩いて鳴る、パンプスのヒールの音。それにかき消されてしま
う程度の声でつぶやく。

同僚や後輩の「結婚します」というフレーズを、これまで何回聞いただろう。

最初の数回こそ、純粹に「おめでとう」という感情しか湧かなかったけれど、最近はそれにまじって、居心地の悪さみたいなものが生じてしまう。

まるで自分が、当たり前のルールに乗っかれていないはみ出し者であるような。この歳になると、結婚して家庭を持つ女友達が急激に増えはじめる。結婚式やその二次会に呼ばれる回数も、ここ二、三年でぐんと増えた。

それに伴い、これまで頻繁ひびんに会っていた友達と、物理的にも精神的にも距離が開きはじめる。しかも一度離れてしまったら、その差は時間が経つごとに開いてしまう一方だったりする。

正直、結構寂しい。今まで構ってくれていた友達が、みんな旦那や子供のほうを向いてしまうのだから。

一度立ち止まって、地面に向けていた視線を上げた。

私を見下ろす位置で照らしている街灯に、小さな虫が群がっているのが見える。

今日は残暑が厳しく、夜でも汗ばむような気候だ。私は、ペースを落として再び歩きはじめた。

——でもだからといって、今の自分を悲観してはいない。

確かに気軽に連絡できる女友達は減ったけど、まったくくないというわけではないし、男友達も一応いる。

「結婚」のタイミングは人それぞれ。同僚の女性が速すみやかに「結婚」という道を辿たどるからといって、私もそうしなければならぬという決まりなんてない。

現在、私が「結婚」という言葉に興味を持たないのなら、それはまだ時期ではないということだ。無理してそれを引き寄せようとする必要はない。

なのに、飲み会での戸塚のように、「年齢的にそろそろ……」と、やたらと結婚を煽おほってくる人間がいる。

「……放はなっておいてほしい」

それに尽きる。本当、放はなっておいてほしい。誰にも迷惑かけてなんていないんだし。

………と思ったところで、今度は、実家にいる両親の顔が浮かんだ。

男つきのまるでない私に、近頃は実家に帰るたびに「いい人はいないの？」やら「私たちが元気なうちに相手を見つけてね」などと、結婚を急せかすような発言をしてくる、父と母。

いや、でも迷惑をかけているのとは違うか。ふたりが過剰に心配しているだけなんだから。

………違うと信じたい。

心配されているうちが華だとは言うけれど……もうすこしだけ、自由でいさせてほしいと思ってしまう。それは我儘わがままなのだろうか？

好きな人ができるまで、敢あえてひとりでいたいという主張は、そんなにも異端なんだろうか。

歩き進めるにつれ、周囲の景色が、駅前のギラついたネオンから住宅街特有の温かな明かりに変わる。自宅まであと数分という距離で、ある公園に差し掛かった。
 こちんまりとした家々が立ち並ぶなか、シヨベルカーでくり抜いたかのようにぽっかりと空いたその公園は、遊具も少なく、空き地のような外観だ。入り口で足を止める。
 飲み会がお開きになったあとすぐに電車に乗ったから、今は午後八時半。

——この時間だけど、いるかな。

心のなかでそう呟きながら、公園の端にある、土管を模した遊具の傍まで歩み寄る。そして、しゃがみこんで土管の内部をそうつと覗きこんだ。

長さ二メートル程度の土管のなかから、にゃあ、と小さな鳴き声が響く。

同時に、丸く小さな影がちょっとビックリしたように動いたのがわかった。
 いた。つい口元が綻ぶ。

「おいで」

私の手を差し出すと、ほんのすこしの間のあと、灰色にうつすら黒い筋の入った前足がぴよこんと飛び出てきた。その足が砂利の地面を踏みしめる。もう一本の前足で私の手を突っついてようやく顔を上げたのは、潤んだ丸い目の美形な猫だ。

この時間ではわかり辛いけれど、明るい場所では緑がかって見えるその瞳はつぶらで、とても愛らしい。

「遅い時間に、ごめんね」

私が無声で謝ると、「別に」とでも言うかのように、寝かせていた両耳を立てた。長い尻尾をびゅんと一振りして、素早く土管の上に乗っかる。

猫はいい。癒やされる。

中腰になり、喉の辺りを人差し指でちよいちよいとなでてやると、サバトラ模様の身体をくねらせながら、もつともつとせがむように顎を上げた。

「いい子だね、アメリカ」

うっとりとした表情で喉を鳴らす様子に、思わずそうももらす。

とはいえ、アメリカというのがこの子の本当の名前なのではない。

その外見が、高級猫としてよく知られているアメリカンショートヘアに酷似しているから、私が勝手に呼んでいるだけだ。

性別も女の子だし、まるで海外映画のヒロインのようで、我ながらいいネーミングなんじゃないかと思っていたりする。

会社帰りにこの空き地でアメリカを見つけて、彼女のもとを訪れるようになってから半年。最初は警戒心むき出しでまったく近寄って来てはくれなかった。けれど、粘り強く通い詰めた結果、こうしてリラックスする姿を見せてくれるまでになったのだ。

「ねえアメリカ、後輩がまた結婚するんだって」

アメリカの喉元をなで続けながら、ぼつりとこぼす。
 「そしたら、あの勘違い男の戸塚がね、『もらい手が無い』なんて言ってくるの。失礼しちゃうと思わない?」

当然ながら私の言葉に返事をするでもなく、アメリカは気持ちよさそうにゴロゴロと喉を鳴らしているだけだ。

「私だって自覚はあるんだから。いちいち言葉にするなつての。つていうか、アイツに言われるなんて不愉快すぎる」

こんなところ、誰かに——特に会社の面々に見られたりしたら大変だ、と思いつつ、やめられない。猫を相手に、愚痴吐き大会。

いい歳して何やってるんだと思うけど、男まさりな性格ゆえに誰かに愚痴をこぼしたりできない私にとって、こういう時間は貴重だったりする。

……あーあ。家でなら、こんな姿を見られる心配をする必要もないんだけどなあ。

いつそアメリカを連れて帰りたいという気持ちもある。けれど、それはなかなか難しい。もともと動物が好きで、実家でも猫やウサギを飼ったりしていた。だから私の気持ち的にはウエルカムなだけで、今のマンションはペット全面禁止なのだ。

というかそもそも、アメリカがノラ猫なのかどうかも怪しい。いつも身体が綺麗だし、毛艶もよく、食べ物に飢えた様子もない。

放任主義の飼い主さんのもつとで、自由を満喫している可能性もある。そう考えると、勝手に連れ去るわけにはいかない。

というわけで、アメリカとの関係は今のこれがベストなのだ。

気が向いたときに会いに行つて、愚痴を聞いてもらい、癒やされる。
 ……あれ? これつて。

お金の介在はないものの、心の隙間を埋めるためにホストクラブにハマっている構図と何ら変わらないのでは? そう気付いて、愕然とする。

愚痴を聞いてもらう相手が人間じゃなくて、猫ってだけじゃない!

でもすぐに、実際にホストにハマり貯金を吸い取られていくよりはよほど健全だ、と自分に強く言い聞かせた。

「アメリカも私のこと、ヤバいつて思う?」

「みやあ」

YESと取れるような返事が、タイミングよく返ってきた。

「こんなときだけ返事しないでよ」

拗ねた私は、喉を擦っていた指を引っこめて、アメリカをじろつと睨んでみせる。

「私だって、恋愛が絶対嫌ってわけじゃないんだよ。素敵だなんて思うような人が現れさえすれば、すぐにだって恋に落ちちゃうかもしれないだし」

そうなのだ。恋ができないのは、私だけのせいじゃない。私が興味を持てるような男性が周囲にいないことが、一番大きな原因のはず。「好きな人、できたら楽しいのかなって思うこともあるけど……」

「けど、彼氏がいる自分、というものを想像しようとしても上手くいかない。どんな男性ならいいのか、どういう部分に惹かれるのか、さっぱり浮かばないのだ。好きってどんな感情だろう？」

……これは重症かもしれない。

誰かを純真無垢じゆんしんむくに好きとかカッコいいと思えたのは、かなり過去のこと。

頭に過よったのは、昔も昔。小学校から中学の途中まで習っていたピアノの教室で見かけた男の子だ。

私と同じくらい歳の年齢なのに、ずば抜けて演奏が上手くて、物静かで神秘的な雰囲気。顔もカッコよくて……王子様を地で行くような子だったっけ。

「こりゃ、当分ひとりかな……」

言いながら苦笑する。思い出されるのが中学生のころのエピソードだなんて、だいぶまずいみたいだ。

とか、考え事をしてしていると、目の前にいたアメリカの姿がなくなっていた。

「アメリカ？」

周囲を見回したり、土管のなかを覗いたりしてみても、やはりいない。

「薄情だなあ、もう」

アメリカにさえも見捨てられてしまった。

私はスカートの砂ほこりをはたきながら立ち上がると、ちよっぴり寂しさを覚えつつも公園を出たのだった。

2

だからだろうか、その夜、懐かしい夢を見たのは。

ある暑い夏の日、中学生の私はピアノ教室にいた。

親の趣味に付き合っつて、嫌々習っていたあのころ。練習にもあまり身が入らず、先生には『ちゃんと練習して来なさい』と怒られてばかりいた。

「わかりました、次週は頑張ります」

と、その場限りの返事をして冷房の効いた部屋を出る。ミンミンと喧やかましく鳴くセミの声が耳に入るとともに、むわっとした空気が顔をなでていく。

そのピアノ教室は、建物のフロア一階に三部屋のレッスン室を構えていた。入れ替え

を含め、ひとり当たり四十分が持ち時間。レッススが終われば速やかに部屋を出て、次の生徒が入室する仕組みになっている。

解放感に浸りつつ、帰ったらアイスを食べようとか、買っておいいた漫画を読もうとか——ささやかな計画を立てながら、待合室代わりに使われているロビーのほうへ歩いていく。

と、ロビーの中心に置いてある円形のソファから、誰かが立ち上がるのが見えた。

——「名波くんなんだ！」と心のなかで小さく叫ぶ。

名波彰悟。彼はこの教室ではとりわけ有名な人だった。

やや色素の薄い、柔らかそうで艶のある髪に、くつきりとした二重。スツと通った鼻筋に引き締まった口元の、整った顔立ち。

付近の名門私立中学校の制服を身に纏い、しゃんと背を伸ばすその様子は、まるでおとき話に出てくる王子様みたいだった。

私と彼が、すれ違う。

窓の外のセミがひときわ高く、長く鳴いた。

立ち止まって振り返った私は、その背をぼんやりと見つめる。

年ごろの女の子であれば、誰だって彼に惹かれるだろう。

実際、ピアノ教室の生徒が集まると、名波くんの周りにはいつもたくさん女の子が

いた。みんな、彼に対して憧れという名の恋心を抱く女子だ。

でも、彼がこの教室で有名だったのは、その目を惹く容姿だけが理由ではない。

名波くんがレッスン室に入ると、私はエントランスではなく彼が座っていたソファへと歩んでいき、そこに腰かける。そして、普段であれば練習時以外には眺めることのない、現在習っている楽譜を取り出して、指の運びを確認したりする。

ほどなくして、レッスン室から美しい旋律が聴こえてきた。

清らかな水が勢いよく、けれどもなめらかに流れ出ていくようなメロディに、そっと目を閉じて聴き入る。

毎週水曜日、彼とレッスンが前後である私は、帰りがけによくこの曲を耳にする。

ピアノに興味の薄い私は、当然、楽曲に対しても明るくなかった。けれど先生に初めて好奇心を持って訊ねたのが、この曲のタイトルだ。

「いつも名波くんが最初に弾いている曲？ ショパンの、黒鍵の練習曲よ」

タイトルを聞いておどろいた。練習曲とは思えない、複雑な楽曲に思えたからだ。

何でも、名波くんはレッスンに入る前、この曲を弾いてウォーミングアップをするらしい。

指の運びの正確さが問われる曲であるのは、聴いただけでも明らかだった。私が弾いたら息切れするほど疲れてしまうレベルの曲なのに、これが準備運動だとは恐ろしい。

だけど、それもそのはず。彼はそんなじよそこの中学生とはまるで違うのだ。小学生のころからピアノコンクールでいくつも賞を取っているという、そのジャンルでの有名な人。

我らが教室の期待の星と呼ばれている。そのため、先生の指導も特別熱心だった。

私が密かに「天才ピアノ王子」なんてあだ名をつけているのは内緒だ。まあ、学校の違う彼とは会話をする間柄でもないし、その名前で呼ぶことはないのだけれど。

私は天才ピアノ王子の軽やかな演奏を聴き終えると、心のなかで拍手をして、ソファから立ち上がった。

——ところで、目が覚めた。

「んっ……」

ベッドの上で仰向けあおむの身体。胸の前で合わせた両手は、ちょうど拍手のようなポーズになっている。その手を解ほどいて、私は前髪をくしやりとかきませた。

——夢か。しかも、何て懐かしい、中学時代の夢。

上体を起こした私は、まだ眠い目を擦すりつつ、枕もとに置いたスマホのアラームを解除した。そしてベッドから床に下りる。

ローテーブルの上のリモコンに手を伸ばし、テレビの電源を入れた。

朝から爽さわやかな笑顔を振りまきながら、今朝のトップニュースを読み上げる女子アナ

の声をBGMに、のろのろと朝の支度を始める。

ワンルームの見慣れた部屋は、今の会社に入ってから長い付き合いだ。

七畳のスペースには、ベッドとローテーブル、ソファ代わりのクッション。背の低い本棚とチェストがくつついた収納ケース、冷蔵庫に電子レンジ。狭い部屋のなかに詰められるだけ詰めているけれど、普通の建物よりも天井がすこし高いせいか、それほど圧迫感はない。

家具や部屋の雰囲気は、赤とかサーモンピンクとか白とか、女性らしい色合いまいで纏まとめている。形も、柔らかさを感じさせる曲線を多用しているものがほとんどだ。

シンクのとなりに位置する扉から、バスルームに移動する。

実家は一軒家だったから、バス・トイレ・洗面所が一緒になっている三点ユニットに慣れるまではすこし時間がかかった。というか今時三点ユニットって……とも思うのだけれど、ワンルームの物件だとまだまだ多く、さほど珍しくはないらしい。

トイレとお風呂が同じ空間というのが、最初は馴染めなかつたけれど、住めば都とはよく言ったものだ。ひとり暮らしもひと月すぎるころには、気にならなくなっていた。むしろ、部屋がわかれてっていると掃除の時間がかかるからかえってよかつたかも、なんて思えるくらいで。

冷たい水で顔を洗い頭を覚醒かくせいさせながら、どうして天才ピアノ王子の夢を見たんだろ

う、と考える。

そして、その理由にすぐに思い当たった。昨日の帰宅前に、彼のことをうつつすらと思
い出したからだ。

好きな人、素敵だなんて思う人——そんなキーワードから連想した、中学生のころの
天才ピアノ王子。みんなの憧れの的。

「本当、私ってヤバいかも……」

いったい当時から何年経っただろう。頭のなかで計算してみる。……十四、五年は経
過しているはずだ。

そんな昔じゃないと該当者がいないなんて！

どんよりと気分が落ちこむ。もつとほら、高校時代とか大学時代とか、キラキラした
思い出がありそうなものでしょ!? と自分に問いかけるも、何も浮かんでこない。と
いうことは、やはりうつつすら付き合っていた相手とは、その程度のものであったのだろう。
なりゆきで付き合いはじめて、なりゆきで音信不通になったりした、薄っぺらい関係
だった、という。

それに比べて、天才ピアノ王子とは直接の交流はほなかったものの、私にとつて彼
の存在はかなりインパクトがあった。

そうは言っても、告白をした、とかそういうことは何もない。結局、意欲不足がMA

Xに達した私は、あのあとピアノ教室を辞めることとなり、それっきり彼を見かける機
会もなくなつた。

「名波くん、元気かな……」

フェイスタオルで顔に滴^{した}る水分を拭^{ぬぐ}いながら、誰に言うでもなく呟^{つぶや}く。くぐもつた
声が、水分を含んだタオルの繊^{せん}維^いの隙^{ひま}間に吸^ひこまれた。

大人になつた今もピアノを続けているのだろうか。それとも、進学や就職を機にキッ
パリと止めた？

もしそうならもつたいないようにも思うけれど、彼には王子様のような美^び貌^{ぼう}というも
うひとつの強みがある。

ピアノから離れたとしても、あのですば抜けて美しい容姿を、他人は放っておかないだ
ろう。

案外、モデルとか俳優とかになつてたりして。その線も十分にあり得る。

おそらくもう二度と会うことのない彼の現在を想像しつつ、洗面台で手早くメイクを
すませると、会社へ持っていくお弁当作りをはじめた。

時間がないときはコンビニで買つたり、近くの定食屋さんですませたりなんてことも
あるけれど、基本的には毎日自分で用意して、持って行っている。

普段の自分は、半分は前日の残り物だ。が、昨夜は飲み会だったために、その手が使

えない。

フライパンでたまご焼きを作る。冷凍庫から小分けに保存していたほうれん草を取り出し、スライスベーコンと合わせてソテーした。並行して、レンジでこれまた小分け保存していたご飯と、お弁当用のミニグラタンを解凍する。

二段式のお弁当箱の下端にご飯を、上段におかず三品をそれぞれ詰める。彩りが足りなく思えたので、隙間にミニトマトを入れこんだ。

蓋をあけたまま粗熱をとっている間に、朝食にする。

お弁当箱に入りきらなかったたまご焼きとほうれん草のソテー、それとお茶碗一杯分のごはんを食べながら、テレビでニュースの続きをチェックした。

すでに政治や経済の情報は終わり、今は芸能コーナーだ。

ふうん、イケメン俳優と、人気女性アイドルグループのメンバーが結婚、か。

派手な色味で強調されたテロップの文字を横目に立ち上がり、冷蔵庫からアイスコーヒーのペットボトルを取り出して、白無地のマグカップに注ぐ。

砂糖の甘みのまったくないコーヒーを喉奥に流しこみつつ、朝食の前に座り直すと、今度は二時間ドラマの宣伝だ。タイトルと内容を見る限り、青春ラブコメらしい。

「はあ……」

右を向いても左を向いても、恋愛、恋愛。

どうして世の中ってやつは、他人に恋をさせたがるのだろう。

そっちがその気なら、できる限り抗ってやろうか——なんてささくれた気分になる。

そんなに恋愛させなければ、名波くんくらい魅力的な男を私の前に連れて来いっていうのよ。

苛立ちながら食事を終わらせ、もう一度テレビに視線を向けた。

テレビのなかでは、お天気お姉さんが「夕方から雨です」と伝えている。

——いけない、折り畳み傘を持って行かなきゃ。

私は通勤用のバッグに折り畳み傘とお弁当をしまおうと、着替えなどの支度をすませ、家を出た。



「瀧川、ちょっと」

お昼休み。自分のデスクでお弁当を広げようとしていたとき、部長が私を呼んだ。

「はい」

返事をする、部長は視線で「こちらに来なさい」というような指示をした。

何だろ。取り出したお弁当箱はそのままに、彼に着いていく。

フロアの最奥に位置する部長のデスクの前に辿り着くと、そこには戸塚の姿もあった。おそらく、私と同じように呼ばれたのだろう。

「瀧川、元氣〜?」

「何でしょう、部長」

私を見るなりフルスマイルで話しかけてくる戸塚を無視し、身体ごと部長を向いた。運営管理部の笹崎部長は四十代半ばで、優しく穏やかな愛妻家だ。

部下に対する面倒見もよく、部長クラスにしては庄迫感の少ない上司といえる。だから、他の上司の面々に比べて話しかけやすく、あまり距離を感じない。そのとっつきやすさが、私たち部下の心をガッチリと掴んでいる。

私は、やけに機嫌のよさそうな部長を見上げた。

「昨日の真辺さんの話、本当によかったよねえ」

「あ、はい」

理穂ちゃんの話——ああ、結婚報告のことか。頷くと、部長は同じ笑顔のまま深い相槌を打つ。

「そうだよねえ、おめでたいよねえ。いや、結婚っていいものだよ、愛する人が傍に居る生活って、張り合いがあるし、癒やされるものなんだよ。真辺さんの幸せそうな顔、見たらどう?」

「はあ……」

確かに理穂ちゃんは幸せそうだったけれど……それと私と、どんな関係があるのだろうか?

話していくうちにどんどん高くなっていく部長のテンションに圧倒されつつ、とりあえず頷きを返してみる。

「失礼だけど、瀧川は結婚の予定は——」

「ないです」

部長がみなまで言い終わらないうちに、遮って答えた。

こういうのは変に会話を長引かせないために、ハッキリ答えてしまうに限る。

「そ、そうか……じゃあ、彼氏は——」

「いません」

先ほどと同じように答えてみせる。

よくあるパターンだ。

『いい歳だし、そろそろ結婚は考えてないの?』

『せめて彼氏くらいはいるんでしょう?』

……聞き飽きてウンザリするレベルの。

部長は何も、私を異端者扱いしようと思っってこんな質問を浴びせかけているわけでは

ない。

彼の温厚な性格を考えると、おそらくは純粹に心配してくれているだけだろう。それはわかっている。

でもまあ、私にちっともそのつもりがないことが伝われば、すんなりと引き下がるだろうことも予想がつく。

本人にその予定と意思が感じられないことに気付くと、大抵は気まぎくなくて顔を背けるものだ。

——そう思ったのに、部長は私の答えを聞き届けると、「そうか」なんて嬉しそうに頷いて、スーツのポケットから白い長封筒を取り出した。

「何です、それ？」

「映画のチケットだよ、二枚入ってる」

開けてみなさいと言わんばかりに、部長がそれを差し出して来たので、受け取って確かを確認してみる。

確かに映画の前売りチケットが二枚入っていた。それも、いかにも若い女性が好きな、男女の純愛をテーマにした『ラブリー・ストレンジジャー』という邦画だ。最近、よくCMや駅前のポスターなどで宣伝しているのでその映画の存在は知っている。

恋愛ものという時点であまりそそれなかつたために、具体的なストーリーはよく知

らないけれど、確かカッコいい男性に片想いし、それが実っていくようなものだったはず。

「観に行かないか？ これを」

「は？」

突然の問いかけにぼかんとしてしまふ。

「えっ、その、部長とですか？」

それはさすがに、問題があるんじゃないか……？

部長には愛する奥様がいるのに、二人きりで恋愛映画なんて観に行けるはずがない。

「いやいや、僕じゃないよ」

両手を大きく振って、否定する部長。そして。

「——戸塚と行ってきなさい」

なんて言いながら、私と部長のやりとりを聞いていた彼を示した。

「いや、前から瀧川と戸塚は合うんじゃないかと思っていたんだよ。聞けば、戸塚も今付き合っている女性はいないらしいし、ちょうどいいじゃないか。どうだ、ここはひとつデートしてみるっていうのも——」

「いやいやいやいや」

どうして、と言いたげな私の表情を読み取ったらしい。流暢に説明しはじめる部長に、

私はストップをかけた。

「冗談じゃないですよ、戸塚とデートだなんて……彼はただの同僚、いやそれ以下ですから！」

入社時期も同じで付き合いは長いけれど、戸塚のことを男として意識したことなんて、ただの一度もない。それどころか、好感を抱いたことだって皆無だ。

そんな男とデートしろなんて言われても、正直言って大迷惑だ。

「ただの同僚以下って！ 瀧川、そりゃ酷くない？」

さすがに本音を言いつぎただろうか。いや、でも事実だし——。戸塚は眉をハの字にして、四の五の言っている。

「本当のことだもの。っていうか、戸塚だってそんな気ないくせに」

「オレは大歓迎だよ？」

彼は、実にあっさりとして承してしまう。

「はっ？」

「映画だろ。それくらい、別にいーじゃん。部長がせっかくチケットを譲ってくれるとおっしゃってるんだから、ご厚意に甘えようぜ」

「な、な、何言ってるの！」

思わぬ反応に、声がついつい震える。そして、手にした封筒をぎゅっと握りしめてし

まった。

「瀧川、チケット」

「あっ」

戸塚に顎で示されたので、慌てて封筒についた皺を伸ばす。

「——私と戸塚が映画？ 休みの日に？ バカも休み休み言つてよ、あんななんてただの同僚以下って、今言つたの聞こえなかったの？」

「聞こえたけど、それって瀧川の強がりだろ？」

「……強がり？」

「それだけ過剰に反応するなんて、実は瀧川もオレに気があるってことじゃなくて？」

「はあっ!？」

この男、正気なんだろうか。勘違いも甚だしい。

拒否反応をしめしていた私の感情に気付くどころか、あまつさえ、自分に気があるって？

啞然としている私を尻目に、部長が満足そうに頷いた。

「戸塚、よく言つた。それでこそ男だ」

そして、戸塚の肩にポンと手を乗せる。

それから部長は、おもむろに私のほうへと向き直つた。

「瀧川。僕は君の男っ気のなさで心配なんだよ。君と同期入社の子、今いる子も含めて、みんな結婚してしまつたらう」

「ぐっ……」

痛いところを突かれ、返す言葉がない。

「決まった相手がないなら、戸塚もこう言つてることだし、お試し感覚で一度デートくらいしてみたらどうだ？　もしかしたら、運命の相手はここにいました——なんてことになるかもしれないぞ」

「オレ、別にお前のこと嫌いじゃないし。『戸塚くんが好き』、付き合つて〜』って思つてるなら素直にそう言えよ。願いを叶えてやらないこともないぜ」

「明日は土曜日で会社は休みだ。鉄は熱いうちに打てというし、早速明日、行ってきなさい」

「瀧川って最寄り駅どこだったっけ？　それとも、会社の近くにする？」

「ちよ、ちよと待つてって！」

テンポのいいコメディを見ているかのように、たた畳みかけてくるふたり。

私の意見など汲くまれずどんどん「デート」の詳細しじょうが決まつていつてしまうことが怖くて、制止をかけてみるが、

「何だ瀧川、何か不都合でもあるのか？」

「不都合なわけじゃないよな？、お前、土日はいつも暇なんだろう？　忙しいなんて嘘は通か用かしないぞ」

とか、間髪容かんはつれずに指摘される。

いくら暇だとしても！　戸塚とデートだなんて死んでも嫌だっ!!　私のプライドにかわる！

「そういうわけで、明日は戸塚と楽しんで来なさい」

「詳しいことはスマホに連絡するから。くれぐれもドタキャンだけは止やめろよ、大人として」

「あっ……あ」

反論するタイミングを失ったまま——いや、むしろ私に反論をさせないつもりで、部長は別の社員のデスクへ、戸塚は自分のデスクへとそれぞれ戻ろうとする。

「——私、か、彼氏いるんで！」

苦し紛れに吐いた言葉で、ふたりが動きを止めた。

そして、鳩はとが豆鉄砲を食らったような顔で、こちらを向く。

「瀧川、嘘はよくないぞ」

「さつき彼氏いないって言つてたじゃん。それに、今までそんな素振そぶり見せたことないし」

部長と戸塚は、冗談だと思って苦笑している。

——その通り、彼氏がいるだなんて、まったくの嘘だ。

でもこうでもしなければデートの刑が執行されてしまうというなら、足掻くしかない！

「う、嘘じゃないっ！」

「ふうん、そ」

ちっとも納得していない様子で戸塚が頷く。そして。

「本命がいるっていうなら、映画館にその彼氏とやらを連れて来いよ。そしたら信じてやってもいいけど……ま、ちゃんと連れて来られたら話だけどね」

「っ……………」

彼はそう挑発すると、部長に挨拶をしてから席に戻ってしまった。

「瀧川、一回くらい戸塚に付き合っただけでもいいんじゃないか？」

部長も、苦し紛れの嘘をつく私を不憫に思ったらしく、そう諭すように言ってから立ち去った。

ひとり残された私は、どこにもぶつけられない苛立ちで戦慄く。

戸塚と映画デート？ それも、部長公認で？

——もうっ！ 何でこんなことになっちゃったの!?

私は皺のついた封筒を睨んでから、まだ手をつけていないお弁当の待つ自分のデスクへと戻った。



仕事終わりの夕刻。私は昨日に引き続き、あの公園に向かっていた。

『映画だろ。それくらい、別にいーじゃん』

『オレ、別にお前のこと嫌いじゃないし。「戸塚くんが好き」、付き合っただけで思ってるなら素直にそう言えよ。願いを叶えてやらないこともないぜ』

戸塚に言われた台詞が渦のようにぐるぐると回って、午後の仕事はまるで手につかなかった。

恋愛モードが思いっきりオフだった私なのに、いきなりデート。しかも相手は、よりよって完全に対象外なあの戸塚。

「どうしてこんなことに……………」

歩きながら、心からの叫びがこぼれてしまう。本当、何でこんなことになっちゃったんだらう。

「行きたくないなあ……………」

再びもれてしまう本音。戸塚と恋愛映画を観に行くなんて、あり得ない。大体、戸塚のことなんてまったく好きじゃない。特に異性としてということであれば、できればお近づきになりたくないレベルと言っている。

というのも、彼はチャラいし馴れ馴れしいし騒がしい上、あの通り、妙に自分に自信を持つている勘違い男だ。私は彼のそういう部分に、入社当時からイライラしっぱなしだった。

後輩の女子社員からも、一応先輩ということもありそれなりに気遣われているように見えるけれど、よくよく聞いてみると『戸塚先輩ってテンション変じゃない？』とか『絶対自分がカッコいいと思ってるよね』など、評価は散々だ。

容姿は特別悪いわけではない。黒い短髪に、ほどよく日に焼けた健康的な肌。芸能人に似るとかそういう華やかなイメージではないものの、どこにでもいそうなお兄さんといった風。

だけど、問題は彼の持つ雰囲気というか、『オレモテてる！』的なオーラだ。それがすべてを台無しにしているといっても過言ではない。

そんな戸塚と一緒にいたところで、ちっとも心が動かない。ドキドキしない。男の人だと思えない。

どうせデートするなら、好きな人がいい。もっとも、今好きな人なんていないわけだから、問題はその前向きになれるの。名波くんみたいな男性と出会うことができたなら、こんなとき、ふっと頭を過るのはやっぱりあの人——名波くんだった。あーあ。会えないのはわかってはいるけど、急に彼みたいなのが現れたりほしくないだろうか。

こんな状態だからこそ、断言できる。名波くんみたいな男性と出会うことができたなら、恋愛に対して前向きになれるの。

……いやいや、そんな素敵な男性が現れたところで、私なんかを相手にするわけがない。夢ばかり見てないで、現実的などころから考えよう。

戸塚とのデートを回避したい。でも、それには口から出まかせに言った彼氏を連れていけないことには無理だろう。

ああ、どうしても嫌だったとはいえ、どうしてあんな嘘ついちゃったかな。

彼氏役を頼めそうな男友達なんていないし、こんな不名誉な事情を話すのも気が進まない。うう、本当に私、どうしたら——

そのとき、鼻の頭にポツリと冷たいものが落ちた。

雨だ、と気付いたときには、コンクリートの地面の色を変える勢いで強く降りはじめている。

慌ててカバンのなかから折り畳み傘を取り出した。

紺地に白や黄色のドットが散ったデザインは、控えめだけれど可愛らしい印象だ。本当は、自室のようにもつとピンク地に白とか、赤地に薄ピンクだとか、いかにも可愛くて女性らしいものが好きなのだけど、周囲から見た自分のイメージには合わない気がして、つい敬遠してしまう。

友達には、決めつけすぎだとか自意識過剰だとか言われるものの、なかなか自分の思うようには振る舞えないのだ。そういう性格も、直したいんだけどなあ……

とにかく天気予報に従って傘を持ってきてよかった。

アメリカもきつと、土管のトンネルのなかで雨粒から身を守っていることだろう。

それとも、こんな日はもつと平和な、あたたかい部屋に移動して、丸くなったりしているのだろうか。

会えたらラッキーくらいのつもりで、公園に行ってみた。すると、こんな激しい雨にもかかわらず、土管には先客がいた。

——誰だろう？

傘も差さないその人は、いつもの私のように土管の前にしゃがみ、内側を覗きこんでいる。

背格好を見るに、男性だ。黒っぽいTシャツに、ジーンズ、それに赤いスニーカーというシンプルでラフな装いをしている。

薄暗い土管のなかからは、水分を含んで毛羽立った灰色の手がひよこつと覗いていた。見慣れた風景なのに、いつもはいない彼の存在によって、まるで違う場所を訪れたような気分になる。

……ここはいつも私がアメリカと過ごしている公園、だよね？

確かめるように、一歩一歩、砂利を踏みしめて近づいていく。

すると、その男性も私に気付いたらしい。振り返り、土管のなかに向けていた視線をこちらに注ぐ。

「……」

目が合った瞬間、思わず息を呑んだ。

何てカッコいいの、この人。えっ、ていうか、これって現実？

しっかりした形のいい眉に、くつきりとした二重の目、高い鼻梁。半月のような色つぼい弧を描いた唇に、逆三角形の小さな顔！

彼は、雨に濡れた前髪をかき上げながら、私を観察するみたいにじっと見た。

まさに、水も滴るいい男。いや、彼の場合、滴ろろがそうでなからうが、どうあってもイケメンだろう。下手な芸能人なんかよりもよっぽど美形だ。

どういう事情で、幻かとも思えるレベルのイケメンが、この小さな公園に？

ここしばらく味わったことのない、胸がきゅうつと締めつけられるような感覚に襲わ

れていると、彼が私を見つめたまま薄く微笑んだ。

その瞬間、何とも言えない懐かしい感覚を覚える。

……初めて会うはずなのに、どうしてだろう。不思議。

「こんなところで、何してんの」

イケメンは声までイケメンだ。すこし低めの、ぐっとくる声。こもった印象のない、聞き取りやすいトーンが好印象だった。

「えっ……あっ……」

私が考えていたことを、先に訊かれてしまった。戸惑いですぐに返事ができない。

「しかも、こんな雨の日に」

——えっ。傘も差していないあなたに言われたくないのだけれど。

「ね、猫に会いに」

突っこみたくなる気持ちをこらえて、素直に答えた。緊張して、声が震える。

「へー」

私の返答に対してイケメンは、興味があるんだかいないんだかわからない相槌を打った。ちょうどそのとき、土管のなかから「にゃあ」と小さな鳴き声が出た。

すこし姿勢を低くして、様子を窺ってみる。すると、微かにだけど、暗がりのなかにキラリと光る眼が見えた。やはり、アメリカだ。

「あんたの猫？」

続けて訊ねられたので、私は姿勢を元に戻し、首を横に振った。

彼が意外そうに眉を上げる。

「じゃ、自分の猫じゃないのにわざわざ会いに来てるわけか」

「そうだけど……。私のマンション、ペット禁止だから」

「ふーん」

イケメンの表情は、微笑みというよりも小馬鹿にしたような薄笑いに変わる。

「そんなに寂しいの？ 人生」

……はい？

耳を疑った。この美しい顔から、そんな辛辣な言葉が飛び出てくるなんて。

「だってそうだよ。金曜の夜だったのに、飼ってもいない猫に会いに来るなんて。よっぽど満たされてないんだなと思って」

まったく無防備だった後頭部を、バットでスコーンと叩き飛ばされた気分だった。

「な、なっ……」

「お、凶星すぎて何も言えない感じ？ あんたみたいなの、よくいるんだよね。ぼっかり空いた心の隙間を、動物で埋めようってパターン」

「……………」

「でも人肌恋しさって、やっぱり人間同士でしか補えないもんだよ。残念だけど、さ」
頭のなかで、何かがブチッと切れる音がした。

我慢の限界。何なの、こいつ！失礼にもほどがあるんですけどっ!?

「——いいかげんにしてよっ。黙って聞いてれば勝手に決めつけてくれちゃって！」

私は怒りのままに、声を荒らげて嘔みついた。

「さ、寂しいとか、満たされてないとか、そんなあなたの勝手な想像でしょ！」

イケメンだからって、悪しざまな態度が許されるわけじゃないはずだ。

そもそも初対面の人間に、どうしてそんな言われ方をされなきゃいけないの!?

「想像？　じゃ、あんたは寂しくもないし、満たされてるわけだ。リア充ってヤツ？」

「え」

「ならそんなムキになることなくない？」

思ってもいなかった返しに、虚を衝かれた思いだった。

憎らしいイケメンは、ふてぶてしいくらいのにこやかな笑みを浮かべている。

「猫相手に仕事や私生活の愚痴なんか吐いたりすること、ないんだろ？　こんな雨にも
かわらずフラッとここに立ち寄ったのは、ただの気まぐれってことだよな。そんなり
ア充なら、俺が言ったこと気にもならないよな」

「っ……」

今度は、のぼせ上がったみたいに顔が熱くなるのを感じた。

この人、私が普段そうしてるのをわかってて、あえて言ってるの？

「何でっ……」

「ん？」

恥ずかしさで眩暈すら感じつつ、やっとのことで訊ねる。

「何で知ってるのっ……？　だ、誰にも話したことないのにな……」

この公園に通っていることは、他の誰にも打ち明けていない。

猫に生活の愚痴をこぼしながら癒やされている——なんてことは、他人にはあまり知
られたくないし、この目の前のいけ好かないイケメン風に言えば、周囲から「そんなに
寂しいの？　人生」と思われかねない。

そんなトップシークレットを易々と言い当てられてしまったことが恥ずかしいやら情
けないやらで、私の声は雨音にかき消される程度のか細いものになっていた。

イケメンは一瞬きよとんとした顔をしてから、ぷつと嘔き出した。

「な、何がおかしいのよっ」

「いや、別に。やっぱり図星だからそんなムキになってんだと思って」

「っ……!!」

結果的に、自分が寂しくて満たされていない人間であると認める形になってしまった。

「別にいいでしょっ、放っておいてよ。あなたに迷惑かけてるわけじゃないだし、誰でもいいから聞いてほしいって思うことだつてあるのよっ……い、言わせないでよ、こんなことっ」

彼氏や、ごく近しい気心の知れた親友がすぐ傍そばにいたなら、そういう人たちに聞いてもらうこともできるのかもしれない。

……でもないんだから、しょうがないじゃない。私の場合は、アメリカに受け止めてもらうしかないの！

私は半ば開き直つて喚わめいた。

そして視線を下げて、小さな水たまりができはじめている砂利じりの地面を恨みがましく睨にらむ。

「——誰でもいいなら、聞いてやろうか」

ビツクリして思わず顔を上げた。

聞こえてきたのは、またも予想外の台詞せりふ。しかも、今回は先ほどと違い、いい意味での。

何かの悪意が隠れているのではないかと彼の表情を観察するけれど、さっきのようなニヤニヤ笑いはなく、不快な感じもしなかった。

でも、そう言いだした彼の意図がわからない。返事をしかねている私に、彼が言葉を

重ねる。

「俺が、あなたの愚痴ぐちを聞いてやるって言ってる」

「どうしてあなたが」

「たまたまここで会ったからっていうんじや、理由にならない？」

「な、ならないでしょ。そんなの……悪いって思うもん。その、あなたに」

「どうして？」

「誰だつて、他人の愚痴ぐちなんて聞きたくないじゃない。そりや、仲良い人ならアリかもしれないけど、そうじゃなければ負担になるだけだし」

さっきまであれだけバカにしていたくせに——とも思いつつ、かといって親切にされるのも気が引ける。

「遠慮してんの？」

「そりや、まあそれなりに」

いかに失礼な相手とはいへ、たつた今出会ったばかりの人。そんな彼に愚痴聞き役を押しつけるのはあまりに酷ひどいと思う。それに、私だつてどこの誰とも知らない男性に、自分の悩みをオープンにするのは勇気が要る。

それでも、イケメンは引かなかった。彼は、土管を椅子代わりに腰を下ろす。

「猫より人間相手のほうが、話した気になるだろ。いいから、話してみろつて。誰でも

いいから聞いてほしいと思うくらいの、理不尽な出来事があったんなら」

「……………」

このまま口を閉ざし、その場を去ることもできる。冷静に考えれば、ずぶ濡れで猫を構っていた彼は不審極まりないし、無礼な物言いも頭にきて仕方がない。

「けど、どういうわけか——私は、この場に留まり、思うところを吐き出すほうを選んでしまった。」

多分、戸塚とのが、本当に私を悩ませていたのだろう。

上司と同僚に言いくるめられ、明日、無理やりデートさせられそうになっていること。その同僚は恋愛対象外で、どうしても前向きになれないこと。

同僚にデートを諦めさせるには、出まかせに口にしてしまった「彼氏」を連れていかなければならないこと。

今現在、特定のパートナーを望んでいないこと、などなど。

私は時折、傘の柄を握る手に力をこめながら、ここぞとばかりに吐き出した。

その間、雨はすこし弱くなったり、逆に強くなったりもした。にもかかわらず彼は、じつと私の話を傾けてくれる。ただ公園で偶然出会っただけの、知らない女のとりとめのない話を。

「……………聞いてもらっただけでも、だいぶスッキリした」

本当だった。周囲の景色とは対照的に、心のなかの雷雨はすっかりおさまり、日の光すら差してきそうな気配さえ感じる。

「あと……………ごめんなさい。これ、今さらだけど」

言いながら、差している傘をイケメンの前に出した。

ストレスを吐き出したいぶ落ち着いてきたら、雨宿りもせずに耳を傾けてくれるイケメンに申し訳なくなっただの。

「本当に今さらだな」

イケメンのほうも、「なぜ今？」とでも言いたげに、喉を鳴らして笑った。面目ない。自分のことしか考えていなかった。

「でももう全身ずぶ濡れだし、気にすることない」

「気にします。その、風邪引いちゃう」

「だとしても、あなたのせいじゃないし」

彼は私を責めるような節は微塵も出さず、もはやシャワーでも浴びていたのではと思うくらいの前髪をかき上げながら首を横に振った。それどころか、

「濡れないように、ちゃんと差しておきな」

と、私の傘を押し返すような仕草をする。

「でも、やっぱり悪いですって」

「平気」

「そう言わずに——」

私のせいで濡れっぱなしだったっていうのに。そのまま自分だけ平然と雨を避けるなんてできなかった。半ば強引にイケメンへ傘を押しつけようとしていると、肩に提^さげていたトートバッグがずり落ちてしまう。

「あっ」

雨に砂利^{じゃり}。こんな状況で荷物をぶちまけようものなら最悪だ。

しかし幸いにも、中身をいくつか落とすだけですんだ。

「ほら——こんなことしていると汚れるぞ」

やれやれという風に肩を竦^{すく}めると彼は立ち上がって、落ちていたボールペンを拾^{ひろ}ってくれる。

「……………」

「あの?」

彼は拾ったボールペンをじっと見つめていた。

その行動を不審に思い私が訊^{たず}ねると、彼は「いや」と首を横に振った。

「俺はいいから、自分は濡れないようにして」

ボールペンを「はい」と言いながら突き返してくる彼。

「……………じゃあ、お言葉に甘えて」

私は彼に譲ろうとしていた傘を、自分のほうに引き寄せた。そして、ボールペンをバッグにしまってから小さく頭を下げる。

「気にしないでいいって。それより——」

彼はひらりと手を振って、ここからが本題だとばかりに声の調子を変えた。

「あなたの目下の悩^もみ^かつてのは、好きでもない同僚の男とデートさせられそうになつて
る——ってことだろ?」

私は頷^{うなず}いた。

「それを解決するいい方法がある」

「えっ」

「教えてやろうか?」

にっこりと邪気のない笑みを浮かべて、訊^{たず}ねてくるイケメン。

「ぜひ! 教えて!」

私は一瞬も迷うことなく、そう言っていた。

明日のデートを回避できる方法があるなら、ぜひとも知りたい!

すると彼は、その笑みのまま続けた。

立ち読みサンプル はここまで